

メタファとメトニミの相互作用

—聖書を読み解く認知メカニズム—

橋本 功・*八木橋 宏勇

キーワード：メタファ、メトニミ、ドメインマトリックス

聖書の英語、聖書ヘブライ語

1. はじめに

本稿の目的は、我々が聖書を読み解く概念的な仕組みを認知言語学的視点から分析し、その一端を明らかにすることである。このテーマの一部は橋本・八木橋 (2006) によって論じられた。そこでは数千年も前に作られた旧約聖書の物語を現代に生きる我々が読み解く仕組みをメタファおよびメトニミの観点から分析し、聖書を読み解く際に生じる問題の所在の一部を明らかにした。本稿においても資料は主に旧約聖書とする。我々にとって数千年にわたる長い時間の隔たりと民族的かつ宗教的な世界観を含む多様な社会文化的相違は越えなければならない大きな問題である。しかしながら「旧約聖書」を創り出したのも、それを読み解こうとしているのも、同じ〈人間〉であるということに揺らぎはない。本稿では、橋本・八木橋 (2006) で提示した「聖書を読み解く鍵は、概念を構築する〈人間〉にある」というスタンスを引き継ぎながら、メタファとメトニミが相互に作用して出来てきた表現を認知言語学的に分析していく。

2. ドメイン理論とメタファおよびメトニミ

「聖書を読み解く」こと、すなわちそれは「聖書が言わんとしている「意味」をつかみとること」である。この「意味」とは一体どのようにして理解されるのだろうか。ある語や表現が表しうる平均的な「意味」は辞書を見れば容易に理解されるであろうが、我々人間と「意味」との関わりはもっと広範でしなやかなものである。例えば、満開の桜には「春」や「最盛の時期」という意味を読み取り、落葉には「秋」や「権力の没落」(池上 1984: 4) という意味を読み取るかもしれない。川の増水を目撃すれば「降雨」や「雪解け」のせいだろうと思いつかべるかもしれない。

人間は関連がないものよりは関連性があるものを認知しやすく、また常に対象を意味のあるものと考え、そのつながりを模索する。これを成瀬 (1989: 58) は「意味の恒常性」と呼び、「言語情報やその他の情報が呈示されると、その時点でわれわれは、その情報の解釈に必要な既有知識を賦活させ、その知識と情報との相互作用によって、解釈に必要な仮説を発見し、最も現実性、一貫性のある解釈を下そうとする」と論じている。認知言語学ではこの意味を「概念」とみなす (Langacker 1991: 2)。つまり概念化を行う主体 (conceptualizer) が事態を把握し、ある視点 (perspective) から解釈 (construal) を施しながら構造化すること

* 慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程

によって、それを表出する一連の認知過程 (cognitive processes) 全体が概念化であり、それによって表象される概念が「意味」であるとする。この事態把握や解釈の際に重要な役割を演じているのがメタファとメトニミであるが、Lakoff and Johnson (2003) が明快に論じているように、それらは単に言語の問題ではなく概念に関わる問題なのである。この「概念」は経験的知識の集合体である「ドメイン」(domain) から独立しては理解できない。例えば「この道路は信濃川に沿って走っている」という文は、客観的に考えれば道路自体は走るはずがないために、偽の文ということになるが、このような言語表現は日本語のみならず英語でも可能である¹。これは、我々概念化を行う主体が知覚的「経験」に基づいて状況を解釈した結果として生み出された事態把握が動機付けとなっているメタファ表現である。「手を貸す」という表現は、物理的な「手」そのものを指すのではなく、何か作業を行うときに最もよく使う箇所が「手」であるために、体の一部分で「人」全体を表すメトニミである。このように、「意味」というものを追求する場合、伝統的な意味論が扱ってきたような「辞書の意味」と、語用論的要素を包含した「百科事典的意味」(Haiman 1980) とを明確に区別することは不可能である。上に挙げた例からも明白なように、意味を読み取る際には経験によって得た知識、すなわち百科事典的知識が不可欠である。この百科事典的知識が心的に構造化されたものがドメインである (Croft 1993: 337)。以下ではまず Langacker (1987), Taylor (2002), Croft (1993), Clausner and Croft (1999), Vyvyan and Melanie (2006) を参考に、概念化の基盤となるドメインが階層構造をなして経験を構造化していることを確認し、それをもとにメタファとメトニミがどのような概念操作であるのかを概観する。

2.1. ドメイン理論

Langacker (1987: 147-150) は、意味は百科事典的なものであり、語や表現の概念 (意味) はより大きな知識構造から独立しては理解し得ないと主張し、この意味理解の前提となる知識構造をドメインと呼んでいる。これを Clausner and Croft (1999: 2) は以下のようにまとめている。

A central principle of cognitive semantics is that concepts do not occur as isolated, atomic units in the mind, but can only be comprehended (by the speaker as well as by the analyst) in a context of presupposed, background knowledge structure. The most generic term for this background knowledge structure is *domain*....

さらに Croft (1993) と Clausner and Croft (1999) は、意味そのものである概念と、概念化が行われる場であるドメインをそれぞれ *profile* (以下 p) と *base* (以下 b) の観点から次のようにまとめている。

¹ Yagihashi (2005: 43-44) は、*"the sun rises in the east"*, *"the river runs into the Pacific Ocean"*, 「津波が都市を襲った」という表現を *Conceptualizer is a viewer* (概念化者は目撃者である) という観点から論じている。

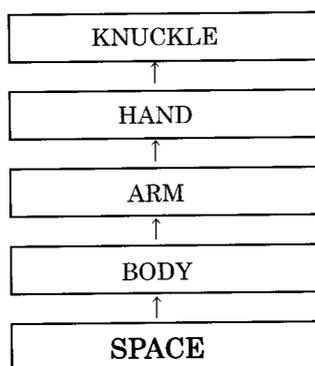
We can define a domain as a semantic structure that functions as the base for at least one concept profile (typically, many profiles).

(Croft 1993: 339)

Langacker uses the terms profile and base to emphasize the relationship between a concept and the domain in which it is found, respectively. A profile is some portion of conceptual knowledge which stands in relation to a base of presupposed knowledge. The term base highlights the way in which background knowledge “supports” the concept, such that the concept cannot be understood without this presupposed knowledge. The profile implies the necessary presence of the domain (base) against which the concept is “profiled”.

(Clausner and Croft 1999: 5)

つまりある概念 (p) を喚起するためには、それと関連する概念全体 (b) を想起しないと理解し得ないということである。例えば「こぶし」(p) という語の意味を適切に理解するためには「手」(b) を知らなければならず、「手」(p) を理解するためには「腕」(b) とはどのようなものを参照しなければならない。さらに「腕」(p) が何たるかを知るためには人間の「体」全体 (b) との関係を分かっているしなければならない。究極的には「体」(p) は三次元的な「空間」(b) を認知できなければ理解し得ないのである。このように、ある概念 (p) の前提となるドメイン (b) は他のドメインを前提とすることができない身体的・生理的レベルまで複雑な階層構造をなしていると考えられる。



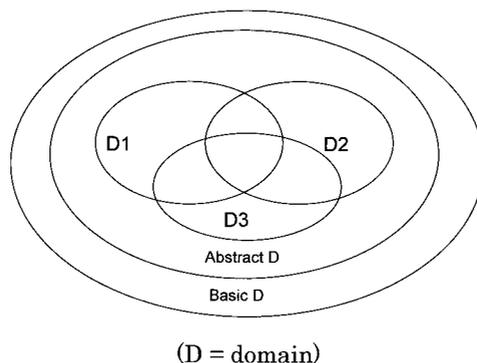
(Vyvyan and Melanie 2006: 232)

「空間」のようにこれ以上他のドメインを前提としないドメインは「基本ドメイン」(basic domain) と呼ばれ、概念化そのものの前提となる経験、例えば「感覚運動的経験」、「知覚的経験」、「身体的経験」、「生理的経験」などをもとに構築されると考えられる。その他のドメインは究極的には「基本ドメイン」に由来しながらも、より複雑な概念を理解するための基盤となるという意味で「抽象ドメイン」(abstract domain) と呼ばれている。このようにあ

る概念は多くのドメインに支えられているわけであるが、このドメインのネットワークを「ドメインマトリックス」(domain matrix)という。ここで考えなければならないことは、ドメインおよびドメインマトリックスとベースおよびプロフィールとの関係である。Langacker (1987: 183) は、表現の意味はドメインマトリックス内でのベースとプロフィールの結びつきにあると論じているが、同じベースであっても異なる面をプロフィールすることがある。これはドメインマトリックスとは様々な百科事典的知識が構造化された実体であるため、その内部には経験的に蓄積された極めて多様な側面が共存しているからである。例えば「円」がベースとなっている場合、「弧」、「半径」、「直径」、「円周」など複数のプロフィールを生み出すことが可能である (Vyvyan and Melanie 2006: 237)。これはそれぞれが経験を通して有機的に結びついた状態で概念として蓄積された結果である。

ドメインマトリックスが経験を通して構築されるものであるならば、聖書を読み解く際に考慮しなければならないことは、文化的な相違による概念化の質に関わる要素である。そもそもドメインマトリックスは、客観的な世界をそのまま吸収して形成されるものではなく、概念化の段階で「解釈」や「視点」といったフィルターを通るために、「情報の置き換え」が関わっていると言うことができよう。人間であれば共有していると思われる身体的・生理的経験や運動感覚的経験といった普遍性のあるメカニズムを用いた情報の置き換えであっても、人、文化、時代、社会が異なれば当然その概念化およびドメインマトリックスにもその差異は顔を出してくるはずである。意味理解には普遍的な「身体的・生理的・運動感覚的基盤」と、ある文化圏内で共有されている「社会文化的基盤」とが関わっており、それらを切り離して論じることはできない。つまり我々はある特定の文化圏内に身を置くことなく生きていくことはできないのであり、そうであるならば意識的にせよ無意識的にせよ、その文化的な様々な種類の要素の上で暮らしていることになる。ある概念を理解するための背景知識のみならず、適切な振る舞いや行動といった動的な側面まで含めて以下のようにドメインマトリックスを考え、論を進めていきたい。

図1. ドメインマトリックス



2.2. メタファとメトニミ

分かり合える世界には〈ことば〉のみならず〈こころ〉が存在する。〈ことば〉は恣意的な記号体系ではなく、意識的にせよ無意識的にせよ我々の〈こころ〉の作用によって動機付けられているというのが最近の認識である。聖書は〈ことば〉を介している。その聖書を読み解く際には必然的に〈こころ〉との密接な関係を考慮に入れなければならない。ここで言う〈こころ〉の働きとは認知作用のことであり、「認知とは、人間が生得的・経験的であるとを問わず、獲得した知識や能力を基盤に、外からの刺激（すなわち情報）を、自身の必要に応じて選択的に受容・処理して、利用し、さらに新たな知識として蓄えるような、能動的かつ主体的な情報処理の活動を意味する」（辻 1991: 46）。この心的な機能が無限に存在する経験を体系化し、既存の概念を操作するとともに新たな概念を生み出しているのである。そもそも概念の構築を行う人間は自身をどのように概念化しているのだろうか。その一端を聖書ヘブライ語・英語・日本語の比較をもとに検討しながらドメインとメタファおよびメトニミの関係を見ていきたい。

Lambdin (1980: XIII-XIV) によれば、旧約聖書の主要部は、ユダヤ民族の伝承として存在していたものが紀元前 1200 年頃から紀元前 200 年頃までの長い期間に渡って文字化された後、収集されて書物になったものである。ユダヤ人の言語はヘブライ語である。紀元前 587 年にユダヤ人の王国がバビロニアに滅ぼされる以前のヘブライ語には他の言語の影響が少なかったが、その後のヘブライ語にはアラム語やギリシャ語の影響が見られる。旧約聖書はヘブライ語で書かれている。旧約聖書のヘブライ語は聖書ヘブライ語 (Biblical Hebrew) と呼ばれているが、本稿では聖書ヘブライ語を単にヘブライ語と呼ぶ。

2.2.1. ドメインマトリックス

まず、〈人間〉の概念化の一側面を考えていきたい。

以下旧約聖書から引用するが、旧約聖書のヘブライ語文はその下に英語の逐語訳を () 内に付すことにする。逐語訳ではハイフンで結ばれている語や句は、原則として、ヘブライ語では 1 語であること、接辞と基語 (base) で構成されている語であること、主語の明示が無い動詞に付加した代名詞であることを示す。また、[] 内の語や句は、ヘブライ語には無いが逐語訳に際して付加した語や句であることを示す。逐語訳の下には 1611 年の欽定訳聖書 (AV) の訳を引用する。これは欽定訳聖書には原典に忠実な訳が多いためである。さらにその下にはヘブライ語文の解釈を明確にするために、必要に応じて、現代英語訳聖書の訳を引用することがある。

(1) אִם-כִּלְי אֵין חֶפֶץ בוּ

B

(or-[is he a] vessel without pleasure in-it?)

הַעֲצָב נִבְזָה נִפְוֶן הָאִישׁ הַזֶּה כְּנִידָה

A

(?-[a] pot despised broken the-man this Coniah [is])

(Jeremiah 22: 28)

(1a) AV: Is this man Coniah a despised broken idole? is hee a vessell wherein is no pleasure?

(1b) ASV: Is this man Coniah a despised broken vessel? is he a vessel wherein none

delighteth?

(橋本・八木橋 2006: 34)

例 (1) では、A の述部 עֵצֶב נִבְזָה נִפְרָץ (pot despised broken) の概念は B の כְּלִי אֵין חֶפְזָן בּוֹ (vessel without pleasure in-it) で反復されている。同一の概念を反復する文章構成法は平行体 (parallelism) と呼ばれ、ヘブライ語聖書の文体的特徴の一つである (橋本 2001² 163-68)。橋本・八木橋 (2006: 35) で示したように、A の述部にある עֵצֶב は一般的には土で作られた壺を指し、この עֵצֶב に対応する B の語 כְּלִי は土以外の材料で作られた壺を表している。これらはともにこの文脈では人間の意味で用いられたメタファである。例えるものと例えられるもの間に両者を取り持つ「類似性」や「関係性」がなければメタファは機能し得ない。壺と人間の間に一体どのような関係を見出しているのだろうか。

〈壺〉		〈人間〉
(2) 木材、土などでできた 1 つの固体	⇔	皮膚に覆われた 1 つの固体
(3) 物を収容できる固体	⇔	能力や感情を内に秘めた固体

(橋本・八木橋 2006: 35)

人間と壺の接点は、ともに「内」と「外」からなる一つの「固体」であるという認知の仕方である。人間を容器に見立てる捉え方は日本語や英語でも広く観察される。

- | | |
|--|-------------------|
| (4) 「 <u>器</u> が小さい」 | |
| (5) 「弱き <u>器</u> 」 | |
| (6) 「このことは <u>自分の中</u> にしまっておく」 | |
| (7) 「すばらしい能力を <u>秘めた人</u> 」 | |
| (8) “a weak <u>vessel</u> ” ² | (弱き器、頼みにならない人) |
| (9) “a leaky <u>vessel</u> ” | (秘密を守れない人) |
| (10) “a chosen <u>vessel</u> ” | (選ばれし者) |
| (11) “the <u>vessels</u> of wrath” | (怒りの器、神の怒りにあうべき人) |
| (12) “Empty <u>vessels</u> make the most sound.” | (頭が空な人ほどよくしゃべる) |

内部に「物を収納する」容器が、内に「能力や感情を宿す」人間へと写像された例であるが、

² OEDはvesselが人を表すことについて聖書の影響を指摘し、vesselの意味拡張のプロセスをメタファによる意味拡張と類似の説明をしている：(vessel) “3. *fig.* (chiefly in or after Biblical use). a. Said of a person regarded as having the containing capacity or function of a vessel. Freq. const. *of* (a condition, quality, etc.). Now *arch.*” OEDが挙げている例には英訳聖書からのものがあるが、そのvesselは上述וֵסֶלの訳として英語に出現したものである：1388 WYCLIF *Gen.* xlix. 5 Symeon and Leuy...fi3tynge vessils of wickidnesse. (下線は筆者による。)

そもそもこのような解釈を導き出す原初的な認知はどのようなものだろうか。言語と文化を越えて観察される解釈には何らかの普遍的なメカニズムが存在するはずである。

先に論じたように、ある概念はいくつかの異なるドメインを前提にして成り立っている。つまり、複数のドメインが解釈の下地となるベースを構成し、その一部がプロファイルされることにより概念として想起されるのである。例えば〈人間〉は〈物理的物体〉、〈生物〉、〈生死〉、〈身体的特徴〉、〈意志を持つ主体〉などといったドメインの統合で概念化されているものと思われる (Croft 1993: 343)。これらは人間であればすべての人が持ち合わせている共有概念であり普遍的なものである。特に〈物理的物体〉というドメインは、〈物質〉、〈空間〉という基本ドメイン、さらに〈形〉、〈位置〉といった高度に一般化された抽象ドメインから成立しており、世界中で無数に存在する物体を認知する上でのベースとなる概念である (Croft 1993: 341-343)。〈人間〉を〈容器〉と見立てる解釈は、〈人間〉に関するドメインマトリックスの中で、〈物理的物体〉に関するドメインがプロファイルされ、さらに呼吸や食物の摂取および排泄という身体の内外に関する直接経験が〈人間〉と〈容器〉を結びつける契機になったと考えられる。この〈容器〉という概念が〈人間〉との関係で言語化される段階で文化的要素の介入が始まり、表現が生み出された時代と社会において〈容器〉と認められた典型的なもの、あるいは形状、大きさ、重量など対象概念に合致するものを選択することにより、壺や器といったより具体的な容器が想起されることとなる。

このように、概念として構築されたドメインはドメインマトリックスという広大なネットワークをなして脳内に貯蔵されている。これは日々新しい経験を処理することにより、絶えず増殖したり修正したりするダイナミックなものである。メタファやメトニミは、この概念ネットワークが構築されていなければ機能しえない。次節ではドメインマトリックスとメタファおよびメトニミの関係を論じ、それらの相互作用を見ていく。

2.2.2. ドメインマトリックスとメタファおよびメトニミ

これまで意味というものをドメインマトリックスの観点から論じてきた。ここでは、一般的に類似性に基づき複数のドメインを結ぶといわれるメタファと、単一のドメイン内で近接性をもとに指示対象をずらすと定義されるメトニミに目を向け、両者も階層的な概念構造が基盤となって機能していることを論じていく。

ほとんどの概念、すなわち意味は複数のドメインによって支えられていることをこれまで見てきた。Lakoff (1987: 288) も、ドメインは ICM (Idealized Cognitive Model) によって構築されていると論じており、メタファとメトニミの定義で一般的にドメインと呼ばれているものは、正確に言うとドメインマトリックスのことであると考えて問題はない。そこで Croft (1993) を参考に、本稿におけるメタファとメトニミを以下のように定義し、論を進めていきたい。

○メタファ：あるドメインマトリックス内にある概念を、それとは独立した別のドメインマトリックス内にある概念によって概念化すること

○メトニミ：単一のドメインマトリックス内で、ある概念を指示するために別の概念が

プロフィールされること

図 2. メタファ

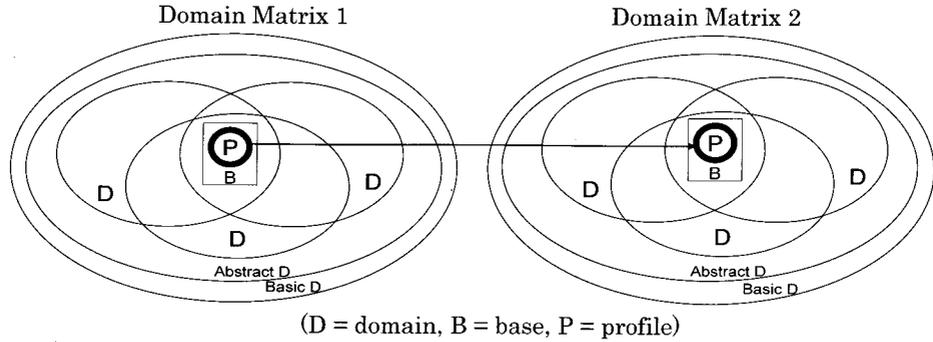
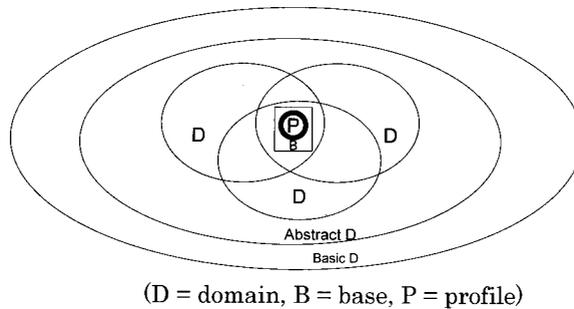


図 3. メトニミ



メトニミの場合、際立ちが高く認知的に捉え易い概念によってより捉え難い対象を指し示すという、同一ドメインマトリックス内での焦点シフトという心的操作を伴っている。Langacker (1993)ではこれを「参照点」(reference point)と「活性領域」(active zone)という概念で説明しているが、上の定義で言う「プロフィール」とは「参照点」経由で指示される「活性領域」のことである。

(13) Denmark shot down the Maastricht Treaty.

(デンマークはマーストリヒト条約を撃ち落した)

(Croft 1993: 335)

上の例はメタファとメトニミが相互に機能して意味を成す一文である。*Treaty*が「政治」に関するドメインを喚起させるため、*Denmark*は「デンマーク政府」、「デンマーク代表」あるいは「デンマーク国民」といった *Denmark* というドメインが内包する諸概念の中から他の語と整合する意味がプロフィールされる。*Denmark*は国名であるため、その上位概念で

ある「国」というドメインが *Denmark* というドメインを支えており、国でありかつ政治の場面で行為の主体となりうる概念がプロファイルされる。これは *Denmark* あるいは国というドメインマトリックス内でのベース・プロファイル関係であるため、メトニミである。一方で、*shot down* は「戦争」あるいは「軍事」のドメインマトリックスを喚起させ、「銃によって敵を倒す」という意味である。*Denmark* と *the Maastricht Treaty* の関係を取り持つ *shot down* は、「戦争」、「軍事」のドメインマトリックスから「政治」のドメインマトリックスへと写像されているために、メタファが全体の解釈に関わっていることがわかる。ここで注目すべきことは、複数のドメインマトリックスが喚起された場合、「ドメインの調整」が計られるということである (Croft 1993: ch. 5.)。メタファは、起点となるドメインマトリックスでプロファイルされた概念を目標となるドメインマトリックスへ写像することによって、後者のドメインマトリックスが全体の解釈を適切に導く心的操作であるということができよう。

3. ヘブライ語聖書のメタファとメトニミ

これまで見てきたドメインマトリックスの機能を軸に旧約聖書の表現をいくつかとり上げ、メタファとメトニミおよびその相互作用について考察していく。

3.1. メタファとメトニミの相互作用

これまでメタファとメトニミは、類似性によって異なる領域を写像するのか、それとも近接性に基づいて単一の領域内にある複数のものを結ぶのかによって、定義上、区別されてきた。しかしながら、実施には、両者を明確に分類することが困難な場合や、相互に作用する場合が多い (Gibbs 1994: 449 - 454; Goossens 2002: 356-358, 361-366)。それは、両者はそのメカニズムこそ異なるものの相互に対立しあう関係ではなく、むしろ概念的な連続性があるがゆえに生じる現象であると考えられる。

- 『類似性』という概念自体が一種の『近接性』である、とみなすことも可能である。なぜなら、『AとBが似ている』ということは、『AとBが(性質や特徴などにおいて)近い』ということを含意し得るからである

(谷口 2003: 157)

- ...the perception of “similarity” is established on the basis of our awareness that A and B are often “contiguous” within the same domain. This frequent contiguity provides us with a “natural”, experiential, grounding for our mapping between two discrete domains.

(Goossens 2002: 368)

- 「メタファーが必ずしも類似性だけではなく、共起性にも基づいている ... たとえば MORE IS UP のような場合、メタファーの起点領域と目標領域の間には何ら類似性はなく、『量が増える』(MORE) ことと『嵩が上がる』(UP) という 2

つの経験が共起することにより、両者の間に対応関係が結ばれ、メタファーを構成している ... このような経験的共起性は実際にメトニミー的である...」

(谷口 2003: 158)

本稿が採用するドメインマトリックスの観点から言えば、先に挙げた図2 および図3 から明らかなように、メタファを生み出す基盤にはメトニミの作用が働いているのである。つまり、あるドメインマトリックス内で焦点が当てられプロファイルされた概念(メトニミ)が他のドメインマトリックス内でプロファイルされた概念(メトニミ)へと写像されたものがメタファなのである。このようにメタファとメトニミは相互に排他的な関係にあるのではなく、むしろ相互作用をし、それによって豊かな表現を創出しているのである。

3.2. 事例1 — *mother / father*

まずは人間を産み出す母がいかに概念化され、どのような解釈が施されているのかを見ていく。

(14) 「母」=分岐点

(14a) כִּי־עָמַד מֶלֶךְ־בָּבֶל אֶל־אִם הַדֶּרֶךְ (Ezekiel 21: 21)
(for-stood king-of Babylon at *mother* of the-way)

(14b) AV: For the king of Babylon stood at the *parting* of the way,

例(14a)の אִם (母)は、「子を産む人」「子を育てる人」「物事を生み出すもと」など様々な側面を持ちうる語であるが、その中から「子を産む」ことに関するドメインがプロファイルされている例である(メトニミ)。子を産む母親が起点となり、その子どもたちがそれぞれまた子を作っていく。このように子孫が枝分かれして行く地点という אִם (母)の捉え方が、「後に現れる多様性の出発点」という共通要素を軸にメタファを介して、「分岐点」(point of departure or division)という解釈をもたらしたものと考えられる。

一世代上の母は、自らの子を産んだ後は老いていずれ亡くなっていく。時に世代の隔たりが人間の生死を含意するのはごく自然な解釈であろう。旧約聖書の世界では אָב (父)は小家族や大家族の家長として権威を持つ存在であるが、さらに大家族を束ねた氏族または部族の長であることもある。そこから אָב (父)は血縁関係のある人びとの一団であり、世代が上の人々すなわち「先祖」という解釈をもたらす。それは同時に死者という読みをももたらす。

(15) 先祖の人々のところへ行く=死ぬ

(15a) תָּבוֹא עַד־דֹּר אֲבוֹתָיו (Psalms 49: 19)
(He-shall go to generation of fathers-of-him)

(15b) AV : Hee shall *goe* to the *generation* of his fathers,

(15c) NLT: they will *die* like all others before them

(15a) では、「先祖」という概念が包含する「一族の亡くなった人々」という側面がプロファイル (メトニミ) されることによって, **דֹר אֲבוֹתָיו** (generation of his father) は「世代が上で亡くなっている人」を示し, そのような先祖と同じ状態になることを, 「行き着く」 (**עָרָה** = go to) と例えている (メタファ)。

3.3. 文化的要素が直接関わるメタファとメトニミの相互作用

メタファとメトニミという概念操作は, 人間であれば普遍的に共有する心的メカニズムであるが, 聖書を読み解く際には時代的, 文化的, 宗教的な壁が立ちほだかる。以下では文化的要素がメタファおよびメトニミに直接関わる例を考察する。

3.3.1. 事例2 - *Cain & Abel*

以下は, カインとアベルはどのようなことをしている人物なのかを知らなければ, 適切な解釈にたどり着くことはできない例である。

(16) カインとアベルの物語 (*Genesis* 4:1-12) とメタファおよびメトニミ

AV: 1 And Adam knew Eue his wife, and shee conceiued, and bare Cain, and said, I haue gotten a man from the LORD. 2 And she againe bare his brother Abel, and Abel was a keeper of sheep, but Cain was a tiller of the ground. 3 And in processe of time it came to passe, that ^(16a)Cain brought of the fruite of the ground, an offering vnto the LORD. 4 And ^(16b)Abel, he also brought of the firstlings of his flocke, and of the fat thereof: and the LORD had respect vnto Abel, and to his offering. 5 But vnto Cain, and to his offring he had not respect: and Cain was very wroth, and his countenance fell. 6 And the LORD said vnto Cain, Why art thou wroth? And why is thy countenance fallen? 7 If thou doe well, shalt thou not be accepted? and if thou doest not well, sinne lieth at the doore: And vnto thee shall be his desire, and thou shalt rule ouer him. 8 And Cain talked with Abel his brother: and it came to passe when they were in the field, that ^(16c)Cain rose vp against Abel his brother, and slew him. 9 And the LORD said vnto Cain, Where is Abel thy brother? And hee said, I know not: Am I my brothers keeper? 10 And he said, What hast thou done? the voyce of thy brothers blood cryeth vnto me, from the ground. 11 And now art thou cursed from the earth, which hath opened her mouth to receiue thy brothers blood from thy hand. 12 When thou tillest the ground, it shall not henceforth yeeld vnto thee her strength: A fugitiue and a vagabond shalt thou be in the earth.

(*Genesis* 4:1-12)

- | | |
|--------------------|--------------------------------------|
| (16a) カイン=農作物を供える人 | ⇒ 農耕民族を表す |
| (16b) アベル=羊を供える人 | ⇒ 牧畜民を表す |
| (16c) カインがアベルを殺害 | ⇒ 農耕文化が牧畜文化を駆逐⇒農耕民が牧畜民より勢力を得たことのメタファ |

人間が死ぬということは、動きが止まるということである。それは身体の機能が停止し、地に伏せるという状態をもたらす。死のこの側面が戦いの領域に写像されると「相手を倒す」、さらには「相手を支配する」という意味を生み出す。(16a) と (16b) にあるように、カインが農作物を供えることから農耕民族全体をプロファイルし、アベルは羊を供えることから牧畜民全体をプロファイルしているメトニミである。また、(16c)にあるように、カインがアベルを殺害するということは農耕民族が牧畜民を倒す、さらに支配するというメタファ的解釈を可能にしている。メタファおよびメトニミが相互に作用している表現であるが、その前提としてカインとアベルに関する背景知識を持ち合わせていないと理解しえない。

3.3.2. 事例3 – *uncircumcised lips*

儀式が言語表現に採用されている例を見てみよう。「表皮を被った」という箇所は割礼の儀式 (*Genesis* 17:10-14, *Leviticus* 12:3) がベースとなって解釈される表現である。

(17) 表皮を被った唇 (*uncircumcised lips*) = *slow of speech; one whose lips are closed as it were with foreskin*

(17a) אֲנִי עֵרְלָ שְׂפָתַיִם (Exodus 6: 30)
(I [am a person of] *uncircumcised lips*)

(17b) AV : I am of *uncircumcised lips*,

(17c) NEB : I am a *halting* speaker,

「唇」は、発音器官としての側面がプロファイルされることによって「発話」の意味が可能になる(メトニミ)³。その唇が עֵרְלָ (表皮を被っている) ということは割礼を受けていない、すなわち唇が清浄でないために、唇が適切に機能しないことを意味している。それが全体として「発話」に関するドメインで解釈されることにより「歯切れの悪い発話」、「口下手」を表すこととなったのである。

3.3.3. 事例4 – *shoe*

儀式のみならず当時の社会的取り決めも言語表現に深く入り込んでいる(橋本・八木橋 2006: 40-41)。たとえば旧約聖書の世界では נֶעַל (靴) に対して現代に生きる我々には推測し難い独特な意味づけが施されている。「靴」が「法的認証」を象徴する存在であったことを見てみよう。

(18) 靴を脱がす = 法的権利を剥奪する

(18a) וְנָגְשָׁה יְבִמְתּוֹ אֵלָיו לְעֵינֵי הַזְּקֵנִים וְחָלְצָה נֶעַל מֵעַל רַגְלוֹ וַיִּרְקַח בְּפָנָיו (Deuteronomy 25: 9)

(and shall draw near sister-in-law him unto him to eyes of the elders and draw off shoe of him

³ 「唇」を「発話」の意味で用いる表現は英語でも散見される。例えば *lip service* (口先だけの発話), *open one's lips* (話す), *watch one's lip* (おしゃべりに気をつける), *Stop your lip* (生意気を言うな) など。

from foot-of-him)

(18b) AV: Then shall his brother's wife come unto him in the presence of the elders,
and loose his shoe from off his foot, and spit in his face,

当時、一族としての責任や権利の履行または譲渡を行う手続きに際して、当事者が自分の靴を脱いで相手に差し出すという習慣があった (Tregelles 1980: 554; 橋本・八木橋 2006: 40 - 41)。つまり、נַעַל (靴) には法的で正式な権利の認証という意味づけがなされていたのである⁴。これは「靴」に関するドメインマトリックスの中に構築されている当時の社会的な習慣が言語表現に反映された例である。メトニミによる概念操作によって「靴」は「法的権利」の側面をプロファイルしており、また同時に全体として「靴を脱がせること」すなわちそれは「靴を取り上げること」であるため、メタファ的思考を介して「法的権利を取り剥奪する」という意味で使われるようになったのである。

3.3.4. 事例5 - snake / cerastes / fruit tree

古代ヘブライ人は、厳しいパレスチナの風土にもめげず強くそして勇敢に暮らしていた。強く生きる自身を、同じ環境で生き抜く動物や植物に例えて描いた寸評が下記 (Genesis 49: 16-22) である。

(19) 古代ヘブライ人のメタファとしての「蛇」, 「蝮」, 「若木」の描写 (Genesis 49: 16-22)

(19a) AV: 16 Dan shall iudge his people, as one of the tribes of Israel.

(19b) HB: 17 יְהִי־דָן נָחֵשׁ עַל־דַּרְדָּרַי שְׂפִיפֵן עַל־אַרְחַ הַנֶּשֶׁף עַקְבֵי־סוּס
(horse)(heel-of) (bites) (on path) (cerastes) (on road) (snake) (Dan)(shall-be)

(Dan shall-be [a] snake on [a] road [,] [an] cerastes on [a] path that-bite heel-of horses)

וַיִּפֹּל רֹכֵבֵו אָחֳרָי

(and-shall-fall rider-of-it backward)

(19b') AV: 17 Dan shall be a serpent by the way, an adder in the path, that biteth the horse heeles, so that his rider shall fall backward.

(19b'') 新共同訳: 17 ダンは、道端の蛇／小道のほとりに潜む蝮。／馬のかかとをかむと／乗り手はおおむけに落ちる。／

AV: 18 I haue waited for thy saluation, O LORD.

19 Gad, a troupe shall ouercome him: but he shall ouercome at the last.

20 Out of Asher his bread shall be fat, and he shall yeeld royall dainties.

21 Naphtali is a hinde let loose: He giueth goodly words.

⁴ Ruth にこのことが以下のように記されている:

AV: Now this was the manner in former time in Israel concerning redeeming and concerning changing, for to confirm all things: a man plucked off his shoe, and gave it to his neighbour: and this was a testimony in Israel. (Ruth 4:7)

- (19c) HB: 22 פָּרֶת יוֹסֵף בֶּן פָּרֶת עַל־עֵינַי בָּנוֹת צִעָדָה עַל־שׂוּר⁵
 (over wall)(make-march)(branches) (by-spring) (fruit tree) (Joseph) (fruit tree)
 (Joseph [is] [a] fruit tree [,] [a] fruit tree by-[a] spring [,] [its] branches make-march over [a] wall)
- (19c') AV: 22 Ioseph is a fruitfull bough, euen a fruitfull bough by a well, whose
 branches runne ouer the wall.
- (19c'') 新共同訳：22ヨセフは実を結ぶ若木／泉のほとりの実を結ぶ若木。／その枝は石垣を越えて伸びる。／
 (新共同訳にある「／」は原典では改行していることを表す。)

(19b) では、パレスチナで生きる部族の人々を裁くダンが נָחָשׁ (蛇) や שָׂפִיפִין (蝮) に例えられている。ただし、נָחָשׁ と שָׂפִיפִין は類似の意味を表す語の反復として用いられている。この種の反復は平行体と呼ばれ、ヘブライ語聖書の散文や詩に頻繁に用いられている (橋本 *ibid.*)。道端に身を隠す小さな蛇や蝮が、悠々と大地を疾走する馬の足元に噛み付いて、乗り手をそこから引きずり落とす。これは、小が大を制するがごとく、パレスチナの人びとが大自然を相手に力強く生きていたことを示すメタファである。「蛇」や「蝮」が時機を窺い、じっと耐え、一瞬にして噛み付き相手を倒すという強靱な側面がメトニミによってプロファイユールされ、さらにメタファによって人間へと写像された例である。ここで言う עֵקֶב (かかと) は身体全体を支える大切な部位であるが、同時に視覚的に死角となる部位である。そのような場所を襲うということは、大自然という強敵に打ち勝つためにパレスチナの人びとがいかにか知恵を凝らし巧みに生き抜いていたかということを表しているのである。このように厳しい風土のパレスチナに生きる人を פָּרֶת בֶּן פָּרֶת (実を結ぶ若木; בֶּן 原義は「息子」), צִעָדָה עַל־שׂוּר בָּנוֹת (その枝は石垣を越えて伸びる) と描いた一節は、自身の部族の繁栄をたわわな実を生み出す「樹木」に関するドメインから表現したものである。雨風にも負けずひたすら地に深く根を張りながら天に向かって伸びていく「若木」によって無限に広がる可能性およびそれを実現する生命力を喚起させる。これら複合的なメトニミが、「樹木」のドメインから「人間」のドメインへとメタファによって結び付けられることによってパレスチナの人びとを表し、さらに若木が בָּנוֹת (枝; 原義は「娘」) を伸ばしながら隣の領地へと浸入して行き、より大きな存在になっていく様子を重ね合わせることにより、樹木が長い年月生き延びるがごとく、自身の一族の繁栄を示しているのである。

3.4. 事例6 - belly / bowels と head

言語は単独で自律的に存在しているのではない。社会および文化の中に身を置く人間が作り出し、そして使っている言語は、当然それらの影響を強く受けている。かつて蒸気動力で走っていた列車は「汽車」と呼ばれていたが、電動機が搭載されるようになると「電車」に取って代わられた。人間を取り巻く環境に変化が生じれば言語はそれに伴い徐々に変容していくものである。

橋本・八木橋 (2006: 34-35) で言及したように、「人間は自身を、皮膚を境にした内と外

⁵ Davidson (1979: 49) によると、この節は部族に関わる古い時代の詩の一説であるので、解釈に困難なところがある。本稿の逐語訳は Davidson (*ibid.*) に基づく。

からなる容器であり、その内に感情が宿っている」と概念化している。概念メタファ **THE BODY IS A CONTAINER FOR THE EMOTIONS** (Kövecses 2002: 184) は古代ヘブライ人にも心理的実在として存在していたのである。この時代や文化を越えて存在する普遍的な概念メタファは、身体の中でも特に重要な臓器である **בֶּטֶן** (belly) と **מְעֵיִם** (bowels) をプロファイルし、感情が司る場所として精微化した (メトニミ) ⁶。これにより、古代ヘブライ人は **THE BELLY (BOWELS) IS A CONTAINER FOR THE EMOTIONS** と捉えていたのである。池田 (2001: 152) は「ヘブライ人は体で見て、体で考える。ヘブライ人にとって体の中心は何であったかと問うなら、それは内蔵であって頭ではなかった。」と述べている。

(20a) מְעֵי מְעֵי אוֹחִילָה קִירוֹת לְבִי

(*bowels-of-me bowels-of-me I-writhe walls-of heart-of-me*)

הַמָּה-לִּי לְבִי לֹא אֶחְרִישׁ

(*growl to-me heart-of-me not I can-be-silent*)

כִּי קוֹל שׁוֹפָר שָׁמַעְתִּי נַפְשִׁי תְרוּעַת מְלִחְמָה (Jeremiah 4: 19)

(*because sound-of horn soul-of-me heard war-cry-of battle*)

(20b) AV: *bowels, my bowels, I am pained at my very heart, my heart maketh a noise in mee, I cannot hold my peace, because thou hast heard, O my soule, the sound of the Trumpet, the alarme of warre*

しかし旧約聖書の時代も終わりに近づく紀元前3世紀の後半には、パレスチナを含むオリエント地方はヘレニズム文化の支配下に入ることになった。この変化は次のような変容を言語表現にもたらした。

(21a) הַחֲכָם עֵינָיו בְּרֹאשׁוֹ (Ecclesiastes 2: 14)

(*the-wise-of eyes-of him [are] in-head-of-him*)

(21b) AV: *The wise mans eyes are in his head,*

古代ヘブライ人がヘレニズム文化圏に身を置くことにより、ものの見方がギリシャの影響を受けるようになったのである。これにより感情の所在は内臓から頭へ移り、(21a) のような表現が出来た。つまりドメインマトリックスに質的な変化が生じたことにより、概念メタファは **HEAD IS A CONTAINER FOR THE EMOTIONS** と修正されたのである。

4. 結語

本稿では、経験を心的に構造化したドメインマトリックスを軸にメタファとメトニミが相

⁶ 日本語の「ガッツ」が由来する gut (消化器官, 腸) の複数形 guts (肝っ玉, 根性, 度胸) にも類似のメトニミによる意味拡張が見られる。

互に関わる表現を考察してきた。メタファは複数のものを比較しそれらを関連付ける「連想」によって機能し、またメトニミは際立ちの大きいものを經由して他の概念を指示する「参照点能力」によって機能している。これらは人間に内在する認知能力によって動機付けられており、人間であれば普遍的に共有している能力である。しかしメタファとメトニミが働く際に概念的な基盤となる経験的知識の集合体であるドメインマトリックスは、環境、時代、社会、信条といった広く文化と呼ばれる要素によって大きく影響を受けるのである。聖書に散りばめられたメタファやメトニミ表現は、生き生きとしたイメージを喚起させるが、同時にそれらの表現を生み出したドメインマトリックスとそれを読み解こうとする際に参照するドメインマトリックスが質的に異なる場合には、その解釈に困難をもたらすこととなる。聖書を適切に読み解くためには、文化がドメインマトリックスの中でいかに概念化されているのかということをも丹念に精査していかなければならないのである。究極的に言えば、古代ヘブライ人と我々はメタファとメトニミという同一のメカニズムを用いて言語表現を生み出したり解釈したりしているが、それらの基盤となるドメインマトリックスが質的に異なるために聖書の解釈は難しいのである。橋本・八木橋（2006）に引き続き「聖書を読み解く鍵は、概念を構築する〈人間〉にある」という本稿の主張は、認知能力によって動機付けられているメタファとメトニミの根本性、およびドメインマトリックスの経験基盤性に論拠があるのである。

参考文献

- Clausner, Timothy C. and William. Croft. 1999. "Domains and Image Schemas." *Cognitive Linguistics*. 10.1. 1-31.
- Croft, William. 1993. "The Role of Domains in the Interpretation of Metaphors and Metonymies." *Cognitive Linguistics*. 4. 335-370.
- Davidson, Robert. 1979. *Genesis 12-50 (The Cambridge Bible Commentary on the New English Bible)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gibbs, Raymond W., Jr. 1994. *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goossens, Louis. 1990 [2002]. "Metaphonymy: the Interaction of Metaphor and Metonymy in Expressions of Linguistic Action." *Cognitive Linguistics*. 1. 323-340. Revised version printed in René Dirven and Ralf Pörings. *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*. Berlin: Mouton de Gruyter. 349-377.
- Haiman, John. 1980. "Dictionaries and Encyclopedias." *Lingua*. 50. 329-357.
- 橋本功. 2001². 『聖書の英語：旧約原典からみた』東京：英潮社.
- . 2006². 「聖書の英語」『英語史入門』東京：慶應義塾大学出版会. 187-215.
- 橋本功・八木橋宏勇. 2006. 「聖書のメタファー分析」『人文科学論集』〈文化コミュニケーション学科編〉（信州大学人文学部）第40号. 27-44.
- 池上嘉彦. 1984. 『記号論への招待』東京：岩波書店.
- 池田裕. 2001. 『旧約聖書の世界』東京：岩波書店.

- Kövecses, Zoltán. 2002. *Metaphor: A Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George. and Mark. Johnson. 2003. *Metaphors We Live By With a New Afterword*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lambdin, Thomas O. 1980. *Introduction to Biblical Hebrew*. London: Darton, Longman and Todd.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 1. Stanford: Stanford University Press.
- . 1991. *Concept, Image, and Symbol: the Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- . 1993. "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics*. 4. 1-38.
- 成瀬武史. 1989. 『意味の文脈—通じる世界の言葉と心—』東京：研究社.
- 菅原俊也. 1987. 『英語言語研究序説—語の認識の可能性と多様性—』東京：三修社.
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』東京：研究社.
- Taylor, John R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Tregelles, S.P. (Trans). 1980¹⁴. *Gesenius' Hebrew and Chaldee Lexicon to the Old Testament Scriptures*. Michigan: WM. B. Eerdmans Publishing Company.
- 辻幸夫. 1991. 「カテゴリー化の能力と言語」『言語』. Vol. 20. No.10. 46-53.
- Vyvyan, Evans and Melanie, Green. 2006. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Manchester: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Yagihashi, Hirotohi. 2005. "Motivations for Idioms: The Pattern of Idioms Woven by Metaphors." *Colloquia*. 26. Dept. of English and American Literature at Keio University. 35-46.
- OED = *The Oxford English Dictionary* (2nd CD-Rom edition). Oxford: Oxford University Press. 1999.

II. 引用した聖書

A. ヘブライ語聖書

HB = *Biblia Hebraica*. (ed.) R. Kittel. Stüttgart: Deutsche Bibelstiftung. 1977.

B. 英訳聖書

ASV = *American Standard Version* = *The Holy Bible, Containing the Old and New Testaments, Translated out of the Original Tongues, Being the Version Set Forth A.D. 1611, Compared with the Most Ancient Authorities and Revised A.D. 1881 · 1885, Newly Edited by the American Revision Committee A.D. 1901*. New York: Thomas Nelson & Sons. 1901.

AV = Authorized Version = *The Holy Bible, Contayning the Old Testament, and the New: Newly Translated out of the Originall tongues: & with the former translations diligently compared and reuised by his Maiesties speciall mandment. Appointed to be read in Churches.* (1611) London: Robert Barker. (Repr.) With an introduction by A. W. Pollard and illustrative documents. London: at the University Press. 1911.

NEB = *the New English Bible.* Oxford: Oxford University Press. 1990

NLT = *The Holy Bible, New Living Translation.* Wheaton: Tyndale House Publishers. 1996.

C. 日本語訳聖書

新共同訳 = 『聖書 新共同訳』東京：日本聖書教会. 1989